文芸プラザ

短編小説

占い師（下）

今井 隆

いまい・たかし 昭和30年、岐阜県芦田郡（現下呂市）萩原町に生まれる。農林水産省に勤務するかたわら、30歳ぐらいから小説、詩、ルポなどを書き始める。文芸同人誌「考夢」主宰。短編で「岐阜市文芸祭賞」受賞。平成12年に水鳥新品種「鵬の雫」を発見し育成。19、20年と、お米の食味コンクールで日本一に輝く。現在は、（資）龍の瞳の代表を務めながら、森の再生などを夢見る。

（三）

ある温泉街の「ホテル夕月」に、広瀬高子は勤めていた。ロビーの受付は、ホテルの顔である。七百五十人の収容定員が全客埋まる日は年に一、二度しかないという程に客足は落ち込んでいるが、高子は元気でしかも落ち着いた声を出し、笑顔を心がけている。一風変わった考え方の持ち主であり、発想の奇抜さで知られているホテル夕月の経営者が、売り上げを増やすためのアイデアを募集した際に、「占いコーナーを設置し、自分が占い師をやります」という提案をし、それが経営者の目に止まって、あっという間に試行の運びとなった。フロントの仕事が暇になる午後七時半頃から簡単な食事をして八時半から占い師に変身する。さすがに、占い師がフロント係と同一人物ではまずいということで、だてメガネと髪を着用することになった。

占いコーナーといっても、ゲーム室の前で「占いしま専科」という冗談半分のような行灯を置いた机と椅子だけというものであった。高子は、今晩から営業が始まるという日の早朝、占いの椅子に座った。午前四時という時刻に、廊下を歩いているものなど誰もいない。

高子はこの一ヶ月ほど、「占いしま専科」の装飾に随分と気を使ったし、開店の日にちが近付いてからは客が自然に自分と向かい合うための方法について考えをめぐらした。空調のかすかな音しか聞こえない廊下が、やや降り勾配になって露天大浴場につながっている。りんごやみかんの盛りかごを描いた大きな油絵が掛けられている。その景色に何の意味などないのだが、と高子は思うが、変化の始まりかもしれない風景を心に刻みたい気もする。

高子は、ふと手相を見た。わずかな手相の変化に気づくためには、二ヶ月もあれば十分である。三十五歳にしては艶がある手のひらを走る刻みをじっと見つめる。離婚した当時と比べると、明らかに小さい皺が減っている。「小さな皺が消えたのは、あまりくよくよしなくなったからですね。そう、今から半年ほど前ですね、あなたにとって何か不幸がありましたね」

そう言ってから、高子は言葉を継いだ。「でも、それは客観的に見れば不幸じゃなかったですよ。ちょうど三十五歳ぐらいで運命線が弱くなっていますが、それからははっきりと太くなっています。離婚は、正解だったんです」

高子は当時のことをふと思い出した。悔しさで眠れない日が続いた。夫に裏切られた気持ちと、夫を奪った女に対して嫉妬にも似た怒りが湧き起こったが、時間が経つにつれて、自分の新しい人生について考えるようになった。

「十分にやり直しのきく年ですから、間違いのない伴侶を得て、もう一度がんばってみてはいかがですか。あなたの手相は、近いうちに好い事が起こると出ていますよ」

高子は静かに笑った。

数ある占いの中で高子は手相を選択した。手相の方が占いに幅が出ると考えた。キャロット占いや四柱易は一般的ではないし、手相を見る振りをしながら相手の容姿、性格を観察し悩みや困り事について考えを巡らす時間もあった。何れの占いであっても、その基礎をしっかりと勉強しなければならないことは言うまでもないが、要は人生経験と洞察力が大切で、客の心配事や困りごとの深層をつかみ、お客が満足できる回答を与えれば占いは成功といえる。

仕事を持った忙しさからか、最近は占う時間もなくなっていたので、果たして当たるのかどうかという不安があった。それを振り払うかのように、「がんばろう」と高子は大きな声を出した。

（四）

北小路孝之は、部屋の窓から眼下の清流を見つめていた。流れを見始めたのは午後四時過ぎだった。太陽の光を反射して明るかった川面は、黄昏時には淡い墨汁を流したように変わって、現在は闇と同化している。食事の準備ができたという電話があったが、「もう少し後で」と断った。

遠くから、鉄橋を渡る列車の音が響いてきた。すでに七時半になっている。ソファーに深く腰掛けながら、孝之は自分の身に降りかかったこの間の出来事を思い返した。

あれほど欲しかったお金は、あっさりと三百万円という大金が入ってきた。孝之が偶然に助けた老人は、たいそうな資産家であるらしかった。緊急手術もうまくいった老人は、医者から孝之がとっさの判断をしなかったら助からない命だったと聞かされた。いろいろなところに、年間数百万円の寄付をしており、命の恩人だから五百万円を受け取って欲しいと言われたが、当たり前のことをしたのだからそれは出来ないと一度は断ったものの、では三百万円だけでもぜひ受け取って欲しいと、半ば強引に受け取らされたのだった。孝之は自分だけがホームレスの社会から足を洗うのは、仲間に申し訳ないという気持ちがあったので、そのうち百万円をホームレス支援のボランティア団体に寄付して、残りの二百万円を生活資金に当てることにした。

債権者がいる故郷には帰ることが出来ず、孝之はとりあえず身の振り方を考えるために有名な温泉街にやってきた。今までの垢を落として、ゆっくりと将来のことを考えたかった。いいことが続く予感がしていたし、急に動くことを仕損じそうに思えた。

窓から見えるこの景色が気に入って、今日で二連泊目である。孝之は、冷蔵庫から缶ビールを一本取り出した。ホームレスの時は、ビールなどという高い酒は飲めなかった。仲間でお金を出し合って安い焼酎を買い、舐めるように飲んだものだった。孝之の掌に冷えたビールの感触が伝わった。痛いくらいにビールは冷えていた。ふと、孝之は凍てつく寒さを思い出した。あれほど辛かった時間が、今となっては懐かしい気がするし、その時に生きる力を貰ったようにも思える。過去点が過ぎれば、楽しいことも悪いことも思い出として薄のように心に溜まっていく。一瞬、一瞬を生きているのは、裸の人間だ。未来を直接見ることは出来ないけれども、毎日の積み上げこそが未来の礎になっていくのか……。そんなことを考えていたときに、再び電話が鳴った。

電話は、案の定夕食の案内だった。先ほど飲んだビールのせいで、孝之は少し酔っていた。食事を済ませて早く寝てしまおうと思った。ホテル夕月の食事は、この辺りの特産である牛肉と地場野菜をふんだんに使っていた。地味噌が味のベースになっているらしく、こくがあるけれども落ち着いた味で、今日はもう飲むのを止めようと思っていたのに、ついビールを一本注文した。

個室での食事だったので孝之は何かしら侘しい気持ちもしたが、仲居さんが一人旅の孝之に気を使ってくれ、この地方の名物料理や最近の不況で家屋敷を取られてしまう人がいることなどを時折話すのが、有り難くもあり時には煩雑しくも感じられた。今、妻と子どもはどうしているのだろうと、ふいに脳裏に浮かんだ。ホームレスの生活をしているとき、妻に一度だけ電話したことがある。妻がびっくりしたような声を出したのは最初だけで、後は感情のない声になった。健康を気遣う言葉もなく子どもの様子を話すでもなかった。子どものことが気になるのは確かだが、妻との生活に戻ることはもうないだろうという予感がしたものだった。それ以来、妻に連絡を取っていない。

食べ終えた食器を運ぶ音や仲居さんの話し声で廊下が賑やかになっている。時刻は既に八時半近くになっている。孝之は風呂に入ることにした。先ほど部屋から見た向い景色が露天風呂からも見える。二日目ともなると、ホテルの様子がかなり掴める。夏休みの観光客はまずいないが、秋の観光には早すぎる九月の初めのこの時期に、観光客が急に減ることをホームレスの仲間から聞いた経験で知ってはいたが、露天風呂から眺めたホテルの部屋の電灯はまばらにしか点いていなかった。

広い露天風呂の中で、孝之は昨晩と同じ場所にゆっくりと体を伸ばした。孝之は、ホテルで自分のやりたいことを決めたいと思っていたが、未だにその像を結ぶことが出来ないでいる。言えることは、長い間携わってきた家電関係の仕事にだけは就きたくないということだった。かといって、何が自分にあっているのか、それも掴めないでいる。

「あーあ」という孝之の呟きとも溜息とも取れる言葉は、湯煙の中に立ち消えた。掌で首や腕や胸を撫でる。アルカリ泉のせいか皮膚がつるつると滑る。孝之は目を瞑ってなおも腹や肩の辺りを撫でた。肉体としての体は確かにそこにあるのだが、前に進もうとする気の力が萎えている。孝之は、「うーん」と唸った。自分がどうしようもなく情けなかった。

孝之は力なく湯から上がって、のぼせた体を石の上に乗せた。尻が妙に心地よかった。ひんやりとした冷気が体を包み、しばらくすると汗も引いていった。孝之はふと、結論をすぐに出す必要がないような気になった。妻のサラ金からの借金発覚、そして、金策に走ったことや夜逃げ、苦しかったホームレスの生活、考えれば心も体も疲れることばかりが続いた。手持ちのお金も十分すぎるほどあるのだから、運を天に任せてみようと思った。すると、すーと気持ちが楽になった。手足を伸ばして湯につかった後に、孝之は勢いよく湯から上がった。

（五）

二十人ぐらいが廊下を通って行ったが、高子に占いを頼むお客は一人もいなかった。たとえ占いに興味を示したとしても単なる遊び心であって、人生の岐路に悩み苦しんでいる人間がホテルなどに来るはずがない、と高子は思った。

孝之は、露天風呂からエレベーターホールに続く廊下に出た。長湯だったので少し疲れを感じていた。この地方の古い民具などを展示している郷土館を見学したり、ハイキングコースを歩いて温泉街を眼下に眺めたりと、気の向くままの行動だったせいか、今日一日でかなりの距離を歩いた。その上、通常より多くビールを飲んだために先ほどから眠気もしていた。

ゆっくりと孝之が廊下を歩いていたとき、占いらしきものが視界に入った。ホテルに占いか……、占いに身を任せるのも悪くはないな、と孝之は思った。近づいたところで、座っている女を見た。こういう商売の割には清楚な感じのする女性だ、と孝之は思った。

「当たるんですか」と、孝之は声をかけた。

「当たりますよ」と言ってから、高子は突然不安になった。浴衣をきちっと着た善良そうな男に見えた。占いが一生を左右するとは思わないが、無責任では済まされない。今は通り過ぎて行ったけれども、きっと戻ってきて手を差しだけだろう、と高子は思った。

ホテルの部屋に戻ると、孝之は眠気が急に失せているのに気づいた。すぐに財布を取り出し、エレベーターに乗った。高子は、廊下の角から男が現れるのを心の中でカウントダウンしながら待っていた。（……五、四、三、二、一）とその時、男の体が見えた。高子は、しばらく途絶えていた勘が戻ったような気がした。

孝之はすぐに高子の所に行った。

「いいですか？」

孝之は料金も聞かずに手を差し出した。せっかちな客だ、それにしても切羽詰まったことでもあるんだろうか、と高子は思った。

明らかに、外で働いている手だった。

「どんなことを占って欲しいんですか」と、高子は聞いた。そう言われて孝之は、はたと考え「ついこの間までホームレスをしてたんです」と言った。

「えっ、ホームレス？」

孝之は手を出したままで、家電店をしていたことや夜逃げ、ホームレス生活、思わぬ大金が入ったことなどを話した。とにかく、聞いて欲しかった。

「今後のことを何でもいいですから、占ってください」

孝之はそう言ってから手を伸ばした。高子は男の手相に驚いた。

「あら、百にぎりですね。感情線と頭脳線が一緒になっています。大体五千人に一人だと言われています」

恋愛についても、近い将来に成就する相が出ていたし、金銭運も強くなるようである。

高子は、天眼鏡でさらに男の手相を見続けながら運気が強くなっている手相について話した。ふと顔を上げると、高子の顔を見ていた男と目が合った。

「いつもこんな占いをやっているの？」

「実は、今日が初めてなんです。あなたが最初のお客さんですね」

孝之は、もう一日早くホテルを出ていたら彼女とも会っていないという偶然に少し驚いた。高子は、男の過去をもっと詳しく知りたいという不思議な気持ちになった。

二十分ほど時間が経っていたし、後ろで次の客が待っている様子だったので、孝之は「ありがとうございました」と言って二千円を払った。

その夜、孝之は目が覚めてなかなか寝付けなかった。窓を開けて夜空を眺めたが、雲に覆われているらしく、星は出ていない。

「曇りのち、雨のち、晴れ、か」と、孝之は呟いた。

翌日、小雨が降っていた。孝之はフロントの女性に、「ホテルの中にいた占い師に連絡したいことがあるんですが……」と話しかけた。フロント係りが、占い師その人であることを孝之は知るよしもない。

「どんなご用件なんでしょうか？」と高子が聞いた。（彼女にときめくんです）と、孝之は心で本音を言ってから口を開いた。

「占いのことでもう一度聞きたいんです」

……ここに彼女の電話番号を書きますので」

高子は自分の電話番号を書きながら、必ず電話が掛かってくると思った。男は、メモ紙を大切そうに上着のポケットに仕舞い込むと高子に丁寧に頭を下げ、雨に煙る街に出て行った。「また、会いましょう」と、高子は遠ざかっていく男の背中に呟いた。ふと、男の名前も聞いていないことに気がついて、高子は微かな笑いをこぼすのだった。

（了）

文芸プラザ